

「見えない・見えにくい人のための相談会」に、来年小学校に入学するお子さんを連れたお母さんがきました。そのお母さんは「うちの子、眼科で検査したら〇・一しか視力が出なくて、眼科の先生に『専門の弱視教育が受けられる盲学校に通つたほうがよい』と言われたんです。でもうちの子、普通に走り回るし、何でもよく見てるみたいだし、『弱視の専門教育』なんていらないですよね」と、必死に訴えました。

お子さんの様子を見ると、確かに初めての所でも活発に走り回って、ちょっと見ただところ、障害のない子どもさんと同じも変わつたところがないように見えました。

しかし、実はこの程度の視力では、もの細かい部分がきちんと見えないし、教科書の文字が細かくなり、取り入れなければならぬ情報が増えてくる小学校三年生の段階になると、学習について

いけなくなることがあります。

ちょうど私も〇・一のロービジョンでしたから、自分の経験を取り混ぜて、「この子には専門の教育や支援が必要です」と説明し、盲学校に見学に行くことを納得してもらい、通学するのに片道二時間もかかる盲学校に入学するのではなく、地元の普通学校に通いながら盲学校の先生が訪問して支援する方法を運ぶことができました。

お子さんの視覚障害が全盲（光も見えない状態）や非常に重度の場合は、その子の歩き方、行動などを見れば、親も周りの人たちもその障害に気づきますし、日常生活上も学習上もハンディが大きいので、専門的

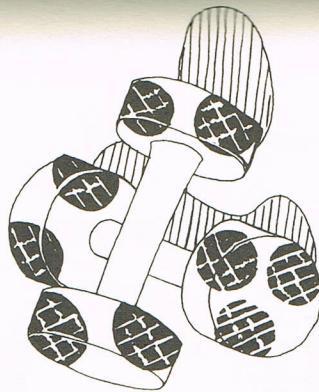
な支援の必要性を受け入れざるを得ません。

しかし、幼い頃からロービジョンのある子どもで、視力が概ね〇・一以上あると、その状態に適応して、「よくものにつづく」とか、「あちこちにぶつかる」ことがあつても、それが「見えにくいことから来ている」ということに、親も周りも気づかない場合があります。「もしかして目が悪いのでは」と思つても「この程度なら普通にやれる」と問題にしなかつたり、また障害を認めたくない気持ちが働いたりします。その上、「盲学校は全盲の子が通うところ」というのが世間の常識ですから、ロービジョン者の存在や見え方、その教育やりハビ

リテーションについて
は、一般に知られていないこともあります。
門機関に行かず、適切な支援も受けないまま大人になるケースが多いです。
また、物心ついた頃から見えにくい子ども



分かりにくい、 そして分かりたくない 軽度ロービジョン



たちは、普通に見えている「見え方」を知らないこと、九歳を過ぎる頃までは、他者と自分の違いを客観的に比べる能力が育っていないので、「みんなのなんんだ」と思つていることが多いのです。

もつと成長していくと、自分が人と比べ見えにくることを自覚するようになりますが、「見えにくい」と助けを求めて弱視用の拡大鏡や弱視レンズ、拡大読書器などの存在を誰も教えてくれないので、何も解決できず、運動や勉強ができない「だめな人間」という劣等感をもつてしまったり、いじめの対象になつたりしている例も多くあります。

残念ながらわが国ではまだ、「障害は悪いもの」「劣るもの」というイメージがあり、親も子もできれば「障害者と見られたくない」「この程度の見えにくさなら、が

んばれば障害者としての配慮はいらない」という考え方方が根強くあります。軽度のロービジョン者は、「障害がないように見せることができる」気がするので、ハンディに対する対応が遅れてしまい、進学、就職、資格の取得などの人生の岐路に立つたときに、突然決定的に「見えにくい」ことを突きつけられて危機的な状況になつてしまうことが多いのです。相談を受けていると「どうしてもつと早く、専門の支援にたどり着けなかつたのか」と思うケースにたくさん出会うのです。

このような状況を改善するには、「軽度であつても見えにくいことは、その子の発

達にとって大きな影響があること」と「ロービジョン者に対する様々な支援法があること」を社会に啓発していく、ロービジョンのあることの早期発見と早期での相談支援の体制を充実していく地道な努力が必要だと思います。

「この子は知的障害があるのでないか」「発達障害があるのでないか」と考えられるお子さんに出会つたとき、視覚障害（軽度のロービジョン）のことも根野に入れて見てあげてください。

*前号の「眼疾患と機能障害一覧」表中の「白子」について、読者より「差別表現である」というご指摘がありました。「白子」は眼科医が現在も通常に使用している診断名ですが、支援を行う専門家として当事者を傷つける言葉を配慮なく使用したこと反省し、眼科医の方たちにも今後問題提起をしていきたいと考えております。

施設から

吉野由美子
よしのゆみこ
視覚障害ハビリテーション協会長